遊びからハンドボールを普及させていく為の方策に関する研究
－特に小学生を対象にして－

大石　龍司　(競技スポーツ学科　コーチングコース)
指導教官　村田正夫

キーワード：遊び、ハンドボール、競技人口

1.　諸言

日本ハンドボール史上 2007 年の北京オリンピックアジア予選において、歴史的な賑わいを見せた。「中東の笛」と呼ばれる、中東の国が有利になるような運営が行われたことを背景に受けている。その事件で、一部試合が再試合になったにも関わらず、五輪出場を果たせなかった日本ハンドボールは再び低迷することとなった。

そこで本研究は、日本ハンドボールがメジャースポーツとして発展していく為の緒施策として、遊びを生かして小学生を対象に競技人口の増加を図ることを目的に研究を行うこととする。

2.　研究方法

本研究の調査対象として本学 4 回生に、筆者が作成した「ハンドボールの認知度・実態」に関するアンケートを配布した。また、文献研究を行い、小学生を対象にしたハンドボールの遊びを導き出した。

3.　結果・考察

1)　ハンドボールの認知度・実態

アンケート結果から、ハンドボール自体の認知度は高いものの、ハンドボールの実施度、情報等は十分とは言えない結果であった。実施度に関しては、特に小学生がハンドボールに触れる機会がなく、競技人口が伸び悩む原因であると考えられる。また、ハンドボールが五輪正式種目であることを知らない人が 44%と過半数近くいることや、ハンドボールの試合を見たことない人が 51%と過半数を超えていることから、ハンドボールの情報は知られているとは言えない。

2)　ハンドボールの効果と普及の方策

ハンドボールは運動の基本動作である、跳・投・走を兼ね備えたスポーツであり、体力の向上や健康の観点からも非常によいスポーツであることがわかった。そこで、小学生を対象に、低学年から高学年まで段階的にコートやルールを設定することで、気軽に遊べるものにした。

4.　まとめ

ハンドボールを遊びという形で気軽にでき、小学生の頃からハンドボールに出会うことで、競技人口も増えることが望める。また、学校や総合型地域スポーツクラブ等で導入することで体力低下の解消も期待出来る。

引用・参考文献

松延　博　他　(1980)　「子供の遊びスポーツ百科　ボールゲーム編」　大修館書店　269 - 274 ページ
http://www.handball.jp/　日本ハンドボール協会
他